

## 「엄마도 아시다시피 (母さんも知ってるように)」 천운영(千雲寧)

- 1971年 ソウル生まれ
- 漢陽大学新聞放送学科とソウル芸大文芸創作科を卒業
- 2000年 東亜日報新春文芸に短編「바늘」が当選して登壇
- 小説集『바늘』(2001)『명랑』(2004)『그녀의 눈물 사용법』(2008)
- 長編小説『잘 가라, 서커스』(2005)『생강』(2011)
- 申東曄創作賞(2003)、今年の芸術賞(2004)等を受賞

### 創批サイト

- Cheon's works depart significantly from such thematic concerns as love, extramarital affairs and urban or middle-class sensibilities that characterized many of the fictional works by female writers in the 1990s.
- The women in Cheon's fictional world are defined not by their reaction to the traditional views of women but by their hedonistic tendencies and the feral, primeval instincts they possess.
- Such vision of womanhood is often expressed through visceral and visually shocking images.

### ● 他の作品

#### 長篇

『생강』 2011 「拷問技術者」이근안 と 다락방

『잘 가라, 서커스』 2005 延辺の朝鮮族から取材

#### 短編

「후에」 2007 『‘작가’가 전정한 오늘의 소설』

父が家を捨てたあと母親と二人の姉妹は家をゴミの山にして、そのなかで楽しく暮らしていた。それが<ゴミの家>としてテレビで話題になり、いろいろな人が家を訪れるようになった。母親は恥じて家を去る。残された姉妹の面倒を見てくれた人々も、話題性がなくなるとしだいに来なくなる。人々の言うとおりに家をきれいにした姉に反抗して妹はダンスに閉じこもっていたが、やがて姉もダンスにとじこもる。

「내가 데려다줄게」 2008 『이상문학상 작품집』

自分を誘惑した女学生からセクハラの告発を受けた大学教師が、沼のほとりで全裸になり、服を車の中に置いて投身自殺をする。気がつくと、沼の近くの一軒家に助けられており、そこには祖母、女、女児の三人が暮らしていた。そこでの生活にやすらぎを覚えた男は、このままここで暮らそうと思うが、ふとしたことで女たちの生活に疑念を抱き、殺されるのではないかという恐怖感から女を強姦する。彼女は黙って彼を受け入れ、そのやすらぎの中で彼は、自分は女学生に誘惑されたのではなく、権力的に誘惑をさせたことに気づく。

「남은 교육」 2009 『이효석문학상 수상작품집』

以前、シナリオを共作した監督と愛人関係にあった主人公の家に、母親が転がり込んできて、生活をかき乱す。母親は自分を捨てた夫の悪口を言いちらし、自分の持ち物は決して捨てようとせず彼女のものを勝手に捨てる。母親の醜さに辟易しながらも、彼女は母を追い出すことができない。監督と仲たがいをした彼女は、よりをもどそうと努力するが突き放され、家にもどって母親の布団に潜り込む。

3編とも『그녀의 눈물 사용법』(2008)に収録されている

● 「母さんも知っているように」の登場人物

그: 12車線ある大きな通りに面したビルの19階にオフィスがある外資保険会社の副社長。

長男なので母親と同居。

朝5時に起床して枕もとの水を飲み、母親に挨拶(아침문안)してから出勤、7時半から勤務開始までは読書を日課とする。「지나지게 단정한, 그다운 일상」p.156

息子の1人はケルン、1人はコネチカットに留学中。

母: ひどいガラガラ声に生れついたが、そのおかげで言葉を選ぶ聡明さを身につけた。

長男그가 10歳のときに夫を亡くし、保険のセールスで3人の子供たちを育て上げる。

식구: 妻 息子2人 弟2人 その妻と子供たち

その他: 뼈다귀해장국집 여자

노래연습장 주인여자

あらすじ（番号は切れ目につけたもの）

1. **[母の死]** ある朝、いつものように部屋に入った彼は、母が亡くなっているのを発見する。ライラックの香りが漂う春のことだった。
2. **[葬式]** きちんと葬式を出し、さまざまな手続きをして礼状を出し終わると、10日の忌引きがちょうど切れた。
3. **[職場]** また前のように職場の生活が始まる。靴ベラが消える事件。不思議なことに、夏になるのにまだ1冊の本も読み終わらない。
4. **[母の声1]** ある日、昼食で牛スープ飯屋に入った彼は、スープを飛ばして上着を汚したので、拭こうとしてハンカチがないことに気づく。母の不在を実感して彼は号泣し、その声のなかに母とそっくりの声を見いだす。
5. **[母の声2]** 母は生まれつきのガラガラ声の持ち主だったが、それを意識して言葉を選ぶ習慣を身につけた。그렇게 내뱉는 말은 무쇠 술뚜껑을 얹어 뜸을 들인 밥처럼 차지고 윤기가 흘렀다. p.163  
彼は、そんな母のもとで育った。10歳の時に父が亡くなった。母がそのとき言った「엄만 금방 안죽어. 그게 엄마야」(p.166)を思いだし、彼は母が自分の声の中に生きつづけていると考える。
6. **[母の보료]** 疲れて帰宅した彼は、母が使っていた보료に寝ころび、母の体型に合わせて縮こまる。
7. **[声の鍛錬]** 彼は母のような声になるために痰を吐く練習をし、母の声を思い出すために一人で泣ける場所をさがす。
8. **[母の伝言]** カラオケルームに行って泣こうとしたが涙がでない。「カラオケに来たんだから歌いなさい」という女主人の言葉を母の伝言と受け取った彼は、歌の練習を始める。
9. **[悲しみを秘めるということ]** 高校に入ったとき、彼は母の仕事が保険のセールスだったことを知った。彼は母に立派な人になると約束して、その後、外資保険会社の副社長にまで昇りつめたのだ。あのとき母が「슬픔을 간직한다는게 뭔지 아는 사람의 목소리로구나. (悲しみを胸に秘めるということがどういうことか、知っている人の声だわね)」と評したシャンソン歌手の歌を思い出す。

10. 【母と子の歌】 猛練習して、彼はとうとうその曲をマスターする。母さんの早豆に寝ころんで足で拍子をとりながら歌う時間が、彼は一番好きだった。  
「そうやっている、歌っているのではなく、聴いているような気がした。母さんが彼に歌ってくれる歌。彼の声で歌う母さんの歌。この世とあの世とで、それぞれの悲しみを胸に秘めて歌う母と子の歌」p.174
11. 【母からの贈り物】 ジェスチャーまでつけて練習していると妻が入ってくる。彼女は何も気づかず、タンスから母の形見の入った箱を出し、甥の大学入試合格祝金を取りだした。妻が外出したあと、彼はタンスを開いて母の韓服を取りだし、腕を通して見る。「贈り物だ。天からの贈り物だ。母さんが天から贈ってくれたんだ」p.176
12. 【母になりきる】 母の韓服を着て、老眼鏡をかけ、リップスティックをつけて、鏡を見ると、そこには母がいた。
13. 【一周忌】 母の一周忌に家族も親戚も彼のマンションに集まった。祭祀がはじまろうとしているとき、彼は母の部屋に行き着替え、みんなの前に出てシャンソンを歌う。

## ● 感想

愛する人の死を認めるかわりに、自分が狂うことでその人を生かしつづけようとする衝動を小説化した作品。

母の死という衝撃は、すぐに表に出ず「彼」の心の底に潜んでいたが、ハンカチの不在を引き金として噴出し、しだいに「彼」を狂わせていく。母の死を受け入れられない「彼」は号泣で潤れた自分の声の中に母の声を見だし、その声を再現するために泣き、つぎに歌い、最後は母の韓服を着て母そのものになろうとする。母を思う心が「彼」を一步一步異常な行動にのめりこませていくが、「彼」はそれを意識しないし、一緒に暮らす妻も気づかない。

もう少し彼の視点に密着して描けば迫力があつたと思う。読者が彼の狂気に最後の場面まで気づかないくらいのテクニックがほしかった。異常な世界を描く場合にはいっその写実力が必要とされる。